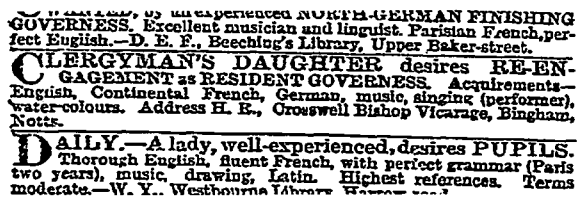


# 「ヴィクトリア期英国国教会聖職者の娘たち —宗教・ジェンダー・アイデンティティ—

山口みどり

## 「親の職」への注目

歴史研究の中で、人物の出自、中でも父親の職種がデータとして利用されることは多いが、その背景に踏みこみ、同様の出自をもつ者をひとつのカテゴリとして研究対象とする手法はこれまでみられなかった。しかしながら、商工業だけでなく、専門職家庭にも「家族企業」としての要素の強く残るヴィクトリア期、「親の職業」という要素はミドルクラスの生活に疑いなく多大な影響を与えていた。ジェントルマン志向の強いミドルクラスにとって、収入や血筋に加えて親の職種は、ジェンティリティを決定する重大な要素でもあった。ブロンテ姉妹の父パトリック・ブロンテ師はもともとアイルランドの貧農の息子であり、国教会牧師としても収入の低さに苦しんだことで知られる。それでもブロンテ姉妹は「牧師」の娘として、ジェントルウーマンとしてのプライドを強く持っていたのである<sup>1</sup>。貧しい聖職者の娘を対象とした「クラージー・ドーターズ・スクール」や、士官の娘のための「ロイヤル・スクール」など、特定の職種の家庭の子弟・子女を対象を絞った一種の慈善学校が存在していたことから、子どもの教育機会が、必ずしも親の所得ではなく親の職種によっても左右されえたことがわかる。さらに当時の女性家庭教師（ガヴァネス）の求職広告には、父親の職種を前面に出すものが散見される(図1)。明確な形での学歴や所属を持たないヴィクトリア期の女性にとって、「父親の職種」は自らの背景を物語る一種の肩書きであり、資格であり、アイデンティティの形成要素でもあったのである。



GOVERNNESS. Excellent musician and linguist. Parisian French, perfect English.—D. E. F., Beechlog's Library, Upper Baker-street.  
CLERGYMAN'S DAUGHTER desires RE-ENGAGEMENT as RESIDENT GOVERNNESS. Acquirements—English, Continental French, German, music, singing (performer), water-colours. Address H. E., Crosswell Bishop Vicarage, Bingham, Notts.  
DAILY.—A lady, well-experienced, desires PUPILS. Thorough English, fluent French, with perfect grammar (Paris two years), music, drawing, Latin. Highest references. Terms moderate.—W. Y., Westbourne Terrace, W.

図1 『タイムズ』紙1881年5月18日の求人・求職欄より

さて、ジェンダーと宗教は歴史研究の中で関心の高まっている分野であるが<sup>2</sup>、牧師館の女性はおそらく教区慈善の文脈で取りあげられてきた。例えばショーン・ギルの『英国国教会における女性たち』では教区慈善に励む牧師の妻や娘を「父親の代理人」として位置づけている<sup>3</sup>。また牧師の妻を扱ったものはワット(1943年)やヒルヤー(1971年)のものなど少数あり、後者は牧師と結婚した牧師の娘たちにも触れている。ジョージナ・バロウズ

の博士論文「ヴィクトリア期国教会聖職者の妻と娘のイメージと認知」(2002年)は国教会の聖職者の妻や娘の表象を追っている<sup>4</sup>。これらに対し、本研究の特色は、教区慈善の場に留まる「妻」ではなく、成長に従い様々な領域を移動する「娘」に焦点をあてている点である。英国国教会は当時の政治／大学・パブリックスクールと密接な関係にあった。審査法の廃止、農業不況、社会の世俗化といった19世紀の政治、経済、宗教的な変化は、国教会を揺さぶり、牧師館に育つ女性たちの人生にも大きな影響を与えたが、彼女たちの苦境は、娘の将来を案ずる父親を通して女子教育や女性の就業に対する国教会の態度を転換させ、社会の変化を促進させた。国教会聖職者の娘たちを中心とした、こうしたダイナミクスを捉えることが研究の主眼である。史料としては、地方の文書館所蔵の家族文書、出版された自伝、日記など伝記的史料から65人、その他、さまざまな機関の資料から合計200人以上のデータを利用している。

#### 宗教的「家族企業」としての牧師館

田舎牧師[...]の仕事のほとんどは、本当はその内助者つまり女性がこなしているのです。

児童文学作家ジュリアナ・ユーウィングは、短編小説「ダーウィンおじさんの鳩小屋」(1884年)の中でこう述べ、自分自身の経験から、土曜の夜のある教区牧師の娘の様子を描いている。彼女はそれぞれ「貯蓄銀行」「衣類クラブ」「図書室」「教区雑誌と聖歌の本」「1ペンス半クラブ」と書かれた袋に入った教区のお金を勘定し、それから「慈善費」の袋に、自分の「小遣い」袋の10分の1を回した。自分の21才の誕生日のお祝いに救貧院の子どもたちがちょっとしたご馳走を食べることができるようにとの配慮である<sup>5</sup>。

ユーウィングが育った19世紀半ば、牧師の妻や娘は「無給の牧師補」と呼ばれ、教区のために働く半公的な役割を担っていた。ほんの半世紀前、ジェイン・オースティンの時代には、まだこうした役割は一般的ではない。19世紀前半の福音主義の浸透、聖職禄権領の禁止、といった流れの中で、牧師館は大きく姿を変えたのであった。勢力を広げる非国教会に対抗し、末端の教区民・貧民に教会の教え、支配的価値観を伝える媒介としての牧師館の役割がクローズ・アップされ、牧師館がさかんに建てられ、牧師が教区に住むことが義務付けられた。魂の救済のために慈善活動の重要性が強調されて行く中、牧師館は教区慈善の本拠地ともなっていく。ヴィクトリア期の牧師館は、いわば支配的な価値観を提示するショーケース的な存在となったのである。

ユーウィングの母親マーガレット・ガティ夫人が友人に宛てた次の手紙の一節は、この

ショーケースの内実をよく表している：

男の子たちの教育のために出きる限りのことをしています。投資のようなものです。女の子たちはうまくやっています。教えたり、病人を看護したり、まるで4人の牧師補のように役に立っています!<sup>6</sup>

教区の模範としての牧師館では、牧師の子弟・遺族がリスベクタブルな生活を維持することが第一の使命であった。それゆえ、ガティ家のようにまずは息子たちを教育によるジェントルマン化の梯子に乗せる必要があった。寄宿学校の学費は高額であったが、これは家族にとって将来の生活保証のための投資でもあった。一方、上の手紙からは、娘の教育が全く度外視されていた様が窺える。こうした家庭では時々必要に応じてガヴァネスを雇いながらも、母親や年長の娘が基本的な教育を担当することにより、できるだけ安上がりに娘たちを教育していたのである。ただし、教える母親自身が当時としては高水準の学識を持つ例も少なくない。例えばマーガレット・ガティは、彼女自身が牧師の娘として国教会という知的ネットワークの中で育った才媛であり、独学で数か国語を習得したばかりか、自然科学では権威的存在であった。ガティ夫人が1863年に出版した海藻についての著書は、スコットランド海洋生物協会で70年以上に渡り教科書として使用されたという<sup>7</sup>。

ともかく、手紙の示すように、牧師館の娘たちの仕事は専ら教区活動であった。司祭が妻帯し、その妻や娘たちが父親を助けて神に仕えるという構図は、司祭が独身を通すカトリック国との対比の上でも望ましいものであった。ヴィクトリア社会の理想とするジェンダー役割分担を表していたことはいうまでもない。もちろん家庭によってその度合いには差があったが、牧師の娘たちはごく幼い頃から教区の仕事に携わった。教会の飾りつけなどの雑用から、日曜学校などでの教育活動、聖歌隊への参加やその訓練、オルガン演奏、教区内の貧民の訪問、病人の看護、慈善活動の運営に至るまで、年齢や能力に応じて様々な仕事が役目に加わった。19世紀前半のある福音主義牧師の妻の言葉が示すように、福音主義の影響下において教区の模範である牧師の娘たちは、「才能の全てを神とキリストのために使う」よう望まれていた<sup>8</sup>。女性の活動領域が厳しく制限されていた時代ではあっても、「神のため」という大義名分がたてば、娘たちにも極めて多様な活動が許される環境が存在したわけである。その活動例には、女性にはタブーとされていた「説教」に類するもの、有料箱型家族信徒席の廃止のように、現行の教会の制度を批判する物まで含まれていた。のちにケンブリッジで初の女子カレッジを創設するエミリ・デイヴィスは、1859年、教区活動の一貫として、父親の教区に女性雇用推進協会の支部をつくり、ダーラム主教をその会長に戴いた<sup>9</sup>。さらに、19世紀後半の多くの牧師館では、労働者階級に健全な娯楽を提供するという大義名分のもと、子どもたちが企画・主演する慈善劇、慈善音楽会が頻繁に催

されていた。

同じく立場上地域の慈善に尽力する必要のある地主の娘たちと比べても、資金面で圧倒的に劣る牧師館は、集金のために創意工夫をこらす必要があった。慈善の資金集めや兄弟の学費を稼ぐために稼ぐことさえも正当化され、いわば稼ぐための才能を伸ばすよう奨励されていた。例えばガティ家では、四人の「無給の牧師補」は母親とともに牧師館を財政的にも支えていた。アルフレッド・ガティ師の年収は 583 ポンドと、平均より若干多い程度であったが、四人の息子をそれぞれイトン、ウィンチェスター、モールバラ、チャーターハウスという名門パブリックスクールに入れた 1850 - 60 年代、牧師館の財政は火の車であった。一人年 100 ポンド以上というその学費を捻出するために、ガティ夫人と娘たちは教区活動の傍ら、月 10 ポンドの報酬で少女雑誌を監修していた。四人の娘たちがイラスト、校正、編集を担当し、ガティ夫人と文才のあった次女ジュリアナを主な執筆者として家族の女性総出で働いていたのである<sup>10</sup>。

児童文学史家ギリアン・エイヴリーによると、1850 - 60 年代は実は日曜学校のテキストを書いて小遣い稼ぎをする牧師の妻や娘たちの黄金時代であった。オースティン、ブロンテ程の知名度はなくても、ガティ、ユーウィング、メアリ・チョムリ、ノエル・ストレトフィールドなど、「牧師館」出身の作家は枚挙にいとまがない<sup>11</sup>。文筆以外にも、小規模な寄宿学校の運営は貧しい牧師館の常套手段であったし、19 世紀後半には慈善劇、音楽会による資金集めも活発になった。エミリ・エイクボームと姉は、新しい教会を建設するために 1859 年に「縫い物会」を結成して教会用装飾品や牧師の法衣を作り、国教会ネットワークを使ってこれらを売ることで、二年間で 100 ポンドを貯めた<sup>12</sup>。

同等の階級の少年たちが寄宿学校へ行って不在の教区で、牧師の娘たちは指導的立場に立ち、教区内である種の権力を持つことができた。その権力は、ユーウィングの描く牧師の娘、すなわち教区慈善の財布を握り、救貧院の子どもたちがその誕生祝いにはせ参じるという姿に象徴されよう<sup>13</sup>。もちろんヴィクトリア期ミドルクラスの女性の多くは慈善活動に従事しており、才能に応じて教会のために働くこと自体は珍しいことではない。しかし牧師の娘たちにとって教区活動は義務であり、彼女たちは教区の必要に応じて自分に合わない役割もこなす「何でも屋」である必要があった。何らかの才能があった場合、それを伸ばすことのでき易い環境だったといえるであろう。

19 世紀後半の宗教刷新運動の中で、こうした女性の貢献はますます増大し、教会の「女性化」は進んでいった。1870 年代に至るまで、牧師の娘の嫁ぎ先は大半が牧師館であった。少女時代から教区活動に精通した彼女等は、牧師館経営のノウハウを嫁ぎ先にも持ちこみ、「ミス・ヴィカー」「ヴィカレス」「ミス・ビショップ」などと呼ばれる新しいタイプ

の牧師の妻、夫の職業上のパートナーとなっていた。それぞれカンタベリー大主教の夫人となったキャサリン・テイトやその娘イディスは、こうしたミセス・ビショップの代表だが、牧師の家族の力を熟知した彼女たちは聖職者とその家族のネットワーク作りに多大な貢献をしたことで知られている。そもそも牧師館は、社交訪問に訪れる地域のエリート家族や親戚・家族の友人だけでなく、陳情に訪れる貧民、母の会に集う女性たち、聖書勉強会に来る若者、堅信礼その他の教会行事に招かれた主教、会合に出席する地元の聖職者、牧師館学校に学ぶ寄宿生たち、学校視察官など様々な身分や立場の人々が訪れる、多重的ネットワークの一拠点であった。聖職者会議の再開（1852年）や、第一回ランベス会議の開催（1867年）は、全国、そして世界中の聖公会聖職者とその家族の交流の機会であり、こうしたネットワークの同志を結びつける場でもあった。国教会ネットワークは急速に拡大・整備されてゆき<sup>14</sup>、農業不況の直前の1870年代、牧師館文化は「黄金時代」を迎えたという<sup>15</sup>。

### 教育改革・職種の拡大と牧師館

この牧師館の最盛期である1870年代、実は牧師館は同時に軌道修正を余儀なくされてもいた。1859年の『種の起源』の出版が示すように、19世紀中ごろには、聖書の正統的な理解に学問的に疑問が投げかけられ、牧師の力の基盤は大きく揺らぐこととなった<sup>16</sup>。さらに、1873年ごろから始まった農業不況の影響で、ヴィクトリア期の初めに500ポンドであった平均年収は、ヴィクトリア期末期には、246ポンドにまで低下した<sup>17</sup>。もともと牧師の家庭には、父親の引退や死亡により収入に加えて住居をも失う危うさが内在しており、貧しい家庭では子女の教育の必要が切迫していた。ガヴァネスの求職広告で、志願者が「牧師の娘」としての出自をアピールするとき、ここにはジェントルウーマンとしてのアイデンティティが誇示されているとともに、ジェントルウーマンの模範となるべき立場でありながら、父親の収入が十分でないため自活を余儀なくされるという矛盾も現れていたわけである。そして、家族・遺族の評判は、この「家族企業」ひいては国教会自体の信用に重要な影響を与えることになる。それゆえ、19世紀を通じて牧師の子弟の学費を減額する学校が建てられ、貧しい牧師の娘のためには「クラージー・ドーターズ・スクール」が建てられていった。

19世紀中頃から始まる女子教育改革や就業機会の拡大にも、牧師の娘の教育は大きく影響された。これは、前述のように、牧師の娘に将来自活する必要性が高かったこと、そして教会と大学・パブリックスクールとの関わりから、教育改革に牧師が非常に密接にかか

わっていたことを考えれば、当然であろう。そして、牧師館の財政がさらに悪化する 1870 年代以降、平均的な牧師の家庭では、ジェントルマンの家族としての理想像を提供するために、娘が稼ぐ必要はますます強まっていくこととなった。1862 年生まれのマーガレット・フレッチャーは両親から「充実した人生を送るためにキャリアを持つよう」教えられて育った。また、同時期にバーンズ姉妹は、弟たちを大学にやるためには自分が職につく必要があることを認識していた。実際に 19 世紀後半、牧師の娘たちは様々な分野で活躍した。教区活動の経験を活かし、教育・看護の分野では、特に成功した牧師の娘が多い。また、教区の慈善劇で活躍した牧師の娘の中には女優業への憧れが非常に強く、バーンズ姉妹やシビル・ソーンダイクのように、実際に女優として大成した女性たちも存在した。

安価な学費で学術的水準の高い「ハイスクール」と呼ばれる通学制の学校が各地に建てられたのもこの時期で、こうした家庭の娘たちに教育の場を提供した。1883 年に発足して、33 校を建てた英国国教会学校会社の創始者も 6 人の聖職者であったが、「自分の子どもたちも対象内である」という認識のもと計画を進めた<sup>18</sup>。1880 年代には、このほかにも牧師の娘を対象とした国教会系のハイスクールが多数創設された。

牧師の娘が学校の創設に関わるケースも多くみられる。こうしたプロジェクトでも、彼女たちが教区活動を経て培った組織力や集金力、そしてネットワークが生きていった。ウィンチェスターのアナ・ブラムストンやリッチーフィールドのソフィア・ロンズデールは 1880 年代にそれぞれの地元でハイスクールを創設したが、この際、採算面の不安から学校会社に出資を断られたにも関わらず、主教をはじめとする教会関係者の全面的な賛同と後援を得られたことが成功の鍵となった。1869 年にケンブリッジ初の女子カレッジ、ガートンを建てたエミリ・デイヴィスは、まだ激しかった女子高等教育への聖職者の反発を嘆いているが、それでもその委員には主教 2 人、聖堂参事会長 3 人が含まれていた。1896 年に名門寄宿学校ウィッカム・アビー校を創設したフランシス・ダヴの父親はエミリ・デイヴィスの兄レウリン・デイヴィスの牧師補を務めたことがあり、ダヴは父親を通じて「少女たちを支援するために多大な貢献をしたたくさんの有名な男性」と知り合った<sup>19</sup>。そして、リンカーン主教の長女でオックスフォード初の女子カレッジ、レディ・マーガレット・ホール学寮長に抜擢されたエリザベス・ワーズワースは、貧しい牧師の娘を高等教育にアクセスさせる必要を痛感し、86 年には、私財を投じて学費の安い学寮セント・ヒューズ・ホールをオックスフォードに建てている。

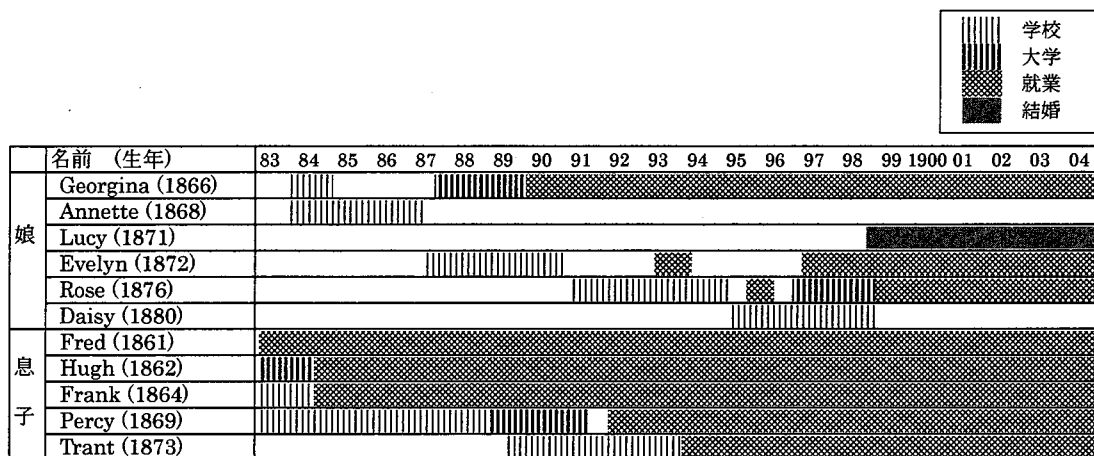
ガートンのエミリ・デイヴィス、レディ・マーガレット・ホールのエリザベス・ワーズワース、そしてセント・ヒューズ・ホールのアン・モバリー、さらにロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ・カレッジのマティルダ・ビショップなど、初期の主要女子カレッジ、特

に国教会系のカレッジでは学寮長は軒並み国教会牧師の娘であった。特にレディ・マーガレット・ホールでは1945年まで三代に渡って国教会牧師の娘が学寮長を務めている。一方、ジョイス・ペダーソンの研究によれば、国教会牧師の娘は初期のオックスブリッジにおける女子学生のうち最も高い割合を占め、ガートン生の少なくとも15%（1869年の創立時から94年までの間）、レディ・マーガレット・ホール生の少なくとも28%（1879年の創立時から94年までの間）が国教会牧師の娘であった<sup>20</sup>。女子高等教育に対する偏見はまだ根深いなか、聖職者の家庭では、女子教育推進に尽力する聖職者からの依頼や、学校長・学寮長をする女性——又はその父親——との人的繋がりに配慮して娘をカレッジに送る例も多かった<sup>21</sup>。ここには、牧師館という知的ネットワークとジェンティリティのショーケースとしての牧師館の存在、そして牧師の収入の低下という要素の間の循環的な関係が存在していた。

19世紀後半の牧師の娘たちの教育機会、さらには就業機会の拡大の背後には、初等学校の教員、教区の貧民の世話といった「無給の牧師補」たちの仕事が、次第に、専門化されたものにとって代わられて行ったという事情もあった。しかし、ここで最後に、1890年代のエセックス州の国教会牧師ビクスビー・ルアードの家族の教育戦略を例に、本稿前半で取り上げた教区活動と、後半で取り上げた教育改革との繋がりを見直し、女性の生活への「家族企業」の影響の大きさを考えてみたい。

教区からの収入が約270ポンドのルアード家でも、娘たちの教育に、息子の後回しとはいえ、できる限りのことをしていた。六人の娘の内、長女はドイツに留学させその後オックスフォードへ、次女以下は順次叔母の家からハイスクールに通わせ、大学地方試験を受けさせた。五女もオックスフォード大学に進学している。ところが、表1の示すように六人の娘の内、三女ルーシーだけは学校教育を全く受けていない。ルーシーも他の姉妹と同様ルアード家牧師館で開いていた寄宿学校で少女たちを教えていたことから、彼女の健康や知力に問題があったとは考えられない。ルーシーがハイスクールにいかなかったことで、学費の負担が重複しなかったこともさることながら、働き手として役に立つ年齢の娘が二人教区に残っていたことは注目に値しよう。第一次世界大戦ころまで、イギリスの裕福な家庭では、娘の一人を独身のまま家庭に残し、大家族の様々なニーズに対応させるという慣行があった。特に、ルアード家のような忙しい牧師館では、こうした女性が、できれば複数求められていた。1890年代末には、高学歴の長女、四女五女の三人は働きに出るが、ここでもやはり二人の娘が牧師館に残っているが、1898年にルーシーが結婚したため、今度は学校教育を受けた次女と六女が残っている<sup>22</sup>。

表1 ルアード家 子女が家庭を離れた期間とその理由



19世紀後半の牧師館は、「稼ぐ」必要の増大により、女性の教育機会、就業機会の拡大の機運を捉え、それを牽引した。また国教会ネットワークと教区での慈善活動の経験に立脚し、公的領域で活躍する女性を数多く生み出した。しかし、同時に、昔ながらに家庭に残って「無給の牧師補」として教区活動をする娘も確保しておく必要があった。両者の組み合わせが19世紀後半における国教会牧師館の生き残りを支えていたといえよう。フェミニズムの影響だけでは説明できない家族企業の事情、戦略がここには表れている。

### むすび

本稿で論じたように、主に家庭で育つヴィクトリア期の女性にとって、親の職と密接に結びつく社会的地位や収入、信用、職種に基づく人脈のもたらす影響は多大なものであった。ヴィクトリア期の牧師の娘たちは教区の中での特殊な立場と、義務としての多様な教区活動、親の地位と収入の不均衡により多大な影響を受けた。こうした特徴は、時代の特徴でもあった。19世紀末から20世紀になると、牧師館の位置付けはまた変化した。20世紀には、牧師の家族のプライバシーを守るため、牧師館を教区から離す傾向もでてきた。また、女子教育においても寄宿学校が普及するに連れ、牧師の娘の生活の大きな特徴であった教区活動は、衰退していった。



- 
- <sup>1</sup> 例えば Juliet Barker, *The Brontës* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1994), p. 354 参照。
- <sup>2</sup> ジェンダーと宗教についての最近の研究としては、例えば以下がある。Sue Morgan and Jacqueline deVries eds., *Women, Gender and Religious Cultures in Britain, 1800–1940* (London: Routledge, 2010); Cullum G. Brown, *Death of Christian Britain: Understanding Secularisation 1800–2000* (London: Routledge, 2001; 2<sup>nd</sup> edn, 2009).
- <sup>3</sup> Sean Gill, *Women and the Church of England: From the Eighteenth Century to the Present* (London: SPCK, 1994), p. 139.
- <sup>4</sup> R[uth] Hillyer, 'The Parson's Wife in History' (M.Phil, London, 1971); Georgina Burrows, 'Images and Perceptions of Wives and Daughters of the Victorian Clergy' (Ph.D. thesis, Oxford Brookes, 2002).
- <sup>5</sup> Juliana Horatia Ewing, *Daddy Darwin's Dovecot* (1884).
- <sup>6</sup> Christabel Maxwell, *Mrs Gatty and Mrs Ewing* (London: Constable, 1949), pp. 115-16; Gillian Avery, *Mrs Ewing* (London: Bodley Head, 1961), pp. 13-4, 18-19.
- <sup>7</sup> Maxwell, *Mrs Gatty and Mrs Ewing*, pp. 91-99.
- <sup>8</sup> W. T. M. Lushington Tilson, *Home Light: or the Life and Letters of Maria Chowne, Wife of the Rev. William Marsh, D.D., by Her Son* (London: Hatchards, 1885).
- <sup>9</sup> Barbara Stephen, *Emily Davies and Girton College* (London: Constable, 1927), p. 53.
- <sup>10</sup> Maxwell, *Mrs Gatty and Mrs Ewing*, pp. 116, 147-48.
- <sup>11</sup> Gillian Avery, *Childhood's Pattern: A Study of the Heroes and Heroines of Children's Fiction, 1770-1950* (London: Hodder and Stoughton, 1975), p. 196.
- <sup>12</sup> 'Victorian', *A Valiant Victorian. The Life and Times of Mother Emily Ayckbowm, 1836-1900, of the Community of the Sisters of the Church, etc.* (London: A. R. Mowbray, 1964), pp.5-6.
- <sup>13</sup> Avery, *Mrs Ewing*, p. 48.
- <sup>14</sup> M. Jeanne Peterson, *Family, Love, and Work in the Lives of Victorian Gentlewomen* (Bloomington: Indiana University Press, 1989), pp. 162-86.
- <sup>15</sup> Gill, *Women and the Church of England*, p. 139.
- <sup>16</sup> 拙稿「英国国教会とその娘たちのために——レディ・マーガレット・ホールという試み」香川せつ子、河村貞枝編『女性と高等教育—機会拡張と社会的相克』昭和堂、2008年7月、第8章参照。
- <sup>17</sup> Owen Chadwick, *The Victorian Church, Part II* (London: Adam & Charles Black, 1970), pp. 168-69.
- <sup>18</sup> E. Moberly Bell, *A History of the Church Schools Company, 1883-1958* (London, 1958), p.15
- <sup>19</sup> Elsie Bowerman, *Stand There a School: Memories of Dame Frances Dove, D.B.E. Founder of Wycombe Abbey School* (Wycombe Abbey School, 1966), p. 35.
- <sup>20</sup> Joyce Senders Pederson, *The Reform of Girls' Secondary and Higher Education in Victorian England: A Study of Elites and Educational Change* (London: Garland Publishing, 1987), pp.241-44.
- <sup>21</sup> Helena Deneke, *Grace Hadow* (London: Oxford University Press, 1946), p. 15; The Bramston-Luard File. MSS. Essex Record Office, D/DLu.
- <sup>22</sup> 拙稿『『ホーム・ドーター』—ヴィクトリア期女性のライフコースからみた Separate Spheres 論』『洛北史学』第5号、2003年6月、1-26頁参照。